



道総研

2026年5月10-11日に金星丸による全湾ラーバ調査および貝毒プランクトン広域調査を実施しました。

● 出現数は多く、湾中央部に多い傾向。

平均出現数は産卵が早かった昨年(2,686個/トン)を下回ったものの、採苗不振であった一昨年(591個/トン)を上回る1,046個/トンと多かったです(図1)。

● 小型ラーバが主体。付着盛期は昨年よりも遅い見込み。

160 μ m前後が主体であり、200 μ m以上の割合は10%未満と少なく、付着盛期は昨年よりも遅い見込みです(図2)。この160 μ m前後のラーバが今後順調に成長し、付着サイズに達することが重要です。今年は既に時計回りの渦が形成されており、ラーバが湾外に流出しにくい条件になっていました(付図1、2)。

● 貝毒プランクトン密度は昨年や一昨年よりも少ない。

貝毒プランクトン密度は湾内では昨年や一昨年よりも少なく、湾外は昨年よりも低く、一昨年と同程度でした(図3)。ただし、湾内では警戒基準値(100細胞/L)を上回っています。

図1 ラーバの分布

湾中央部で最大。一昨年よりも多い。

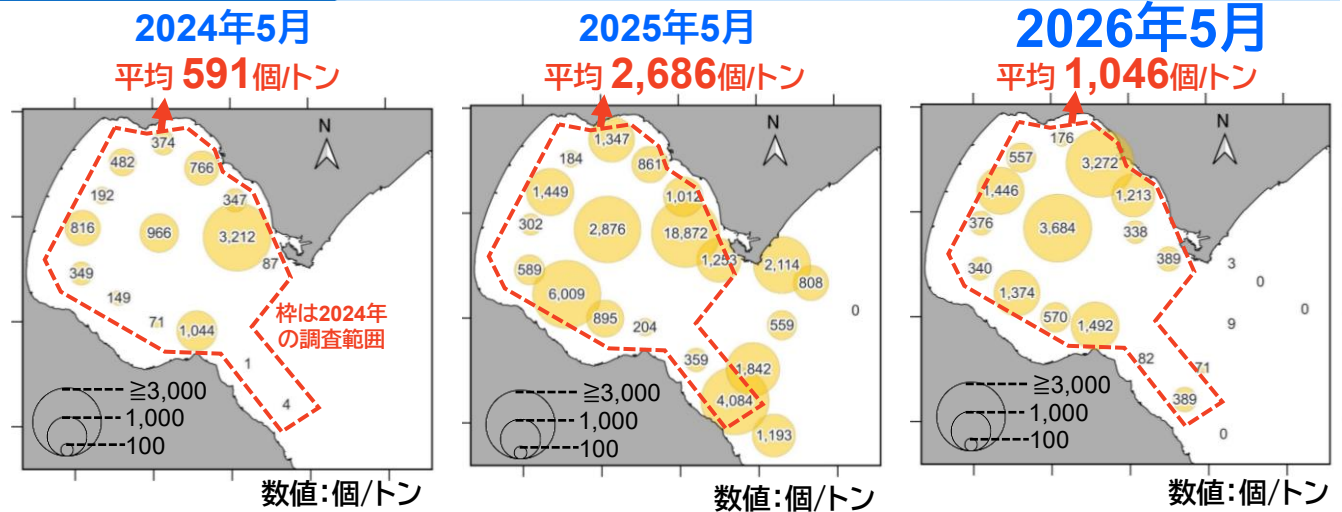


図2 殻長組成

160 μ mが主体。一昨年と同様の組成。

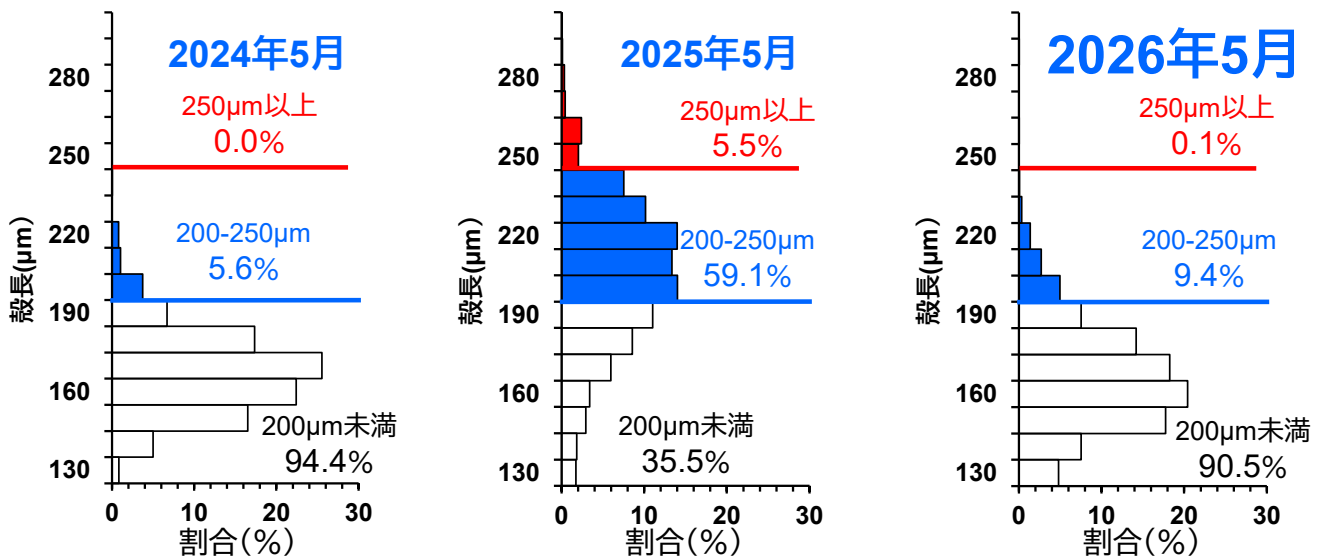
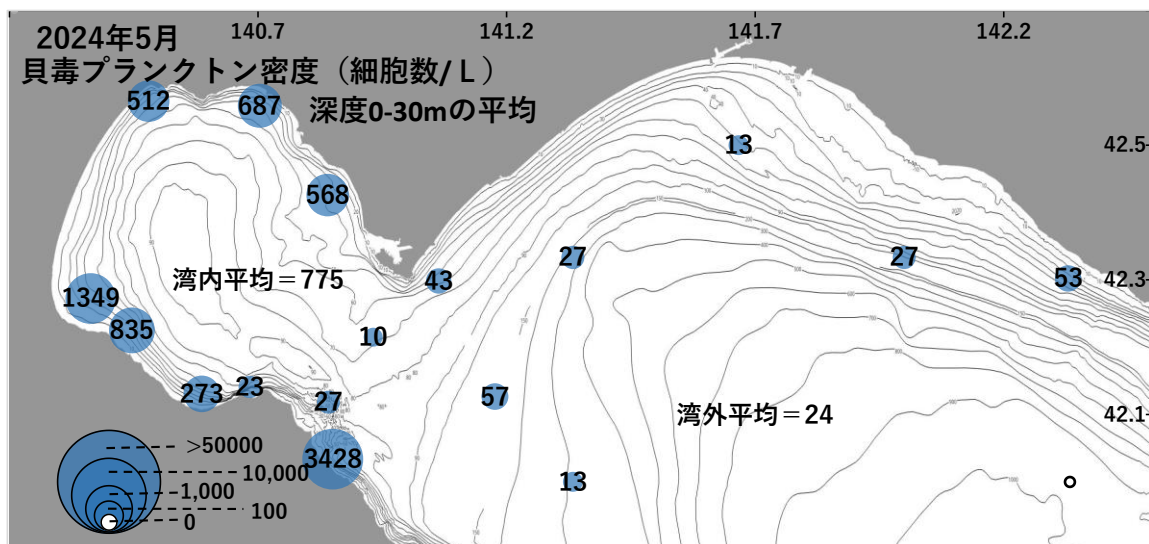
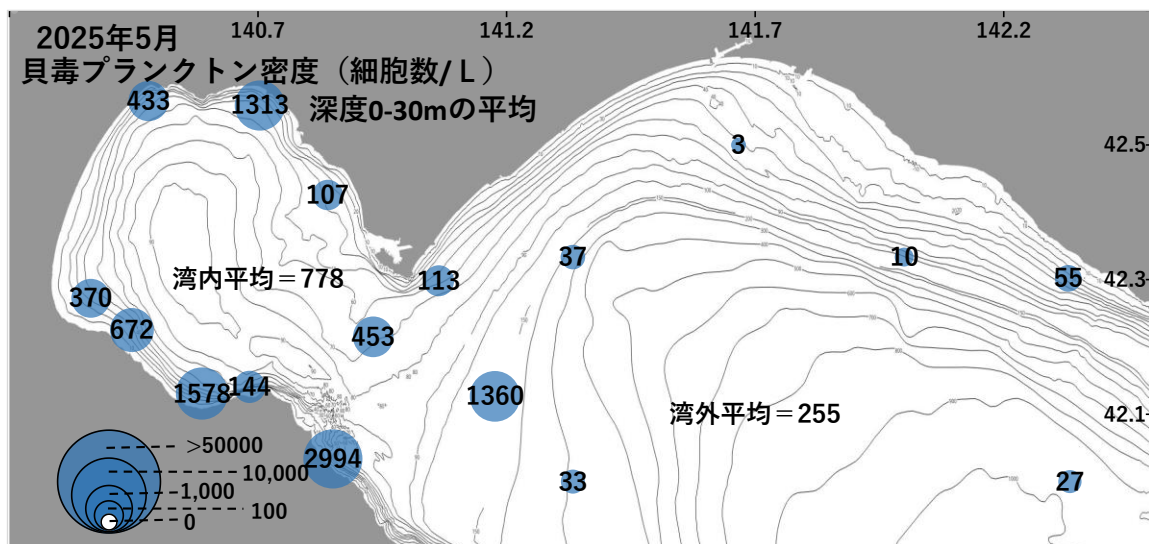
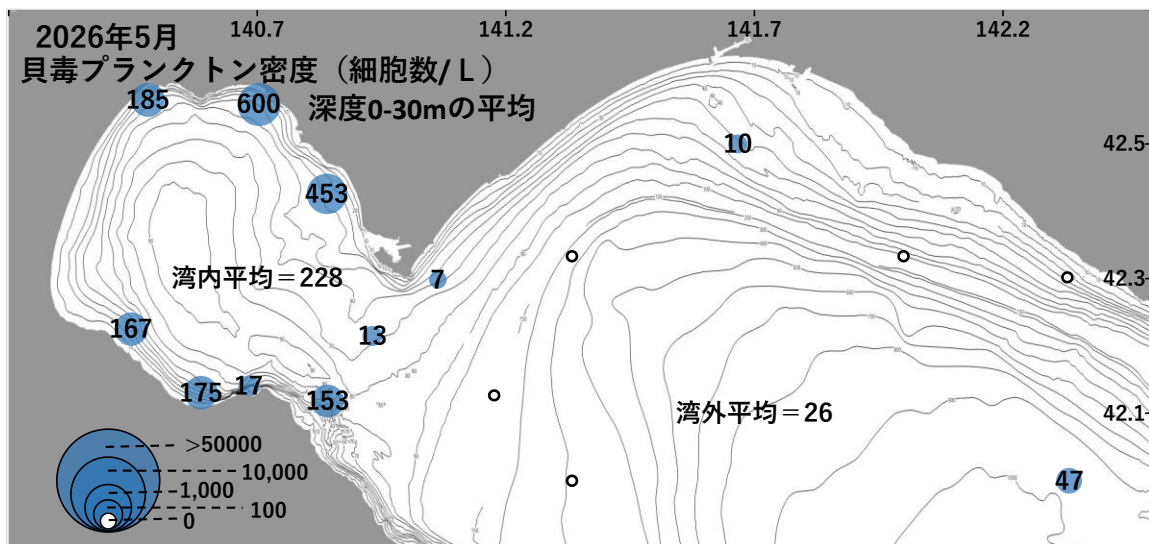


図3 貝毒プランクトン広域

昨年よりも少ない。4月の密度は低い

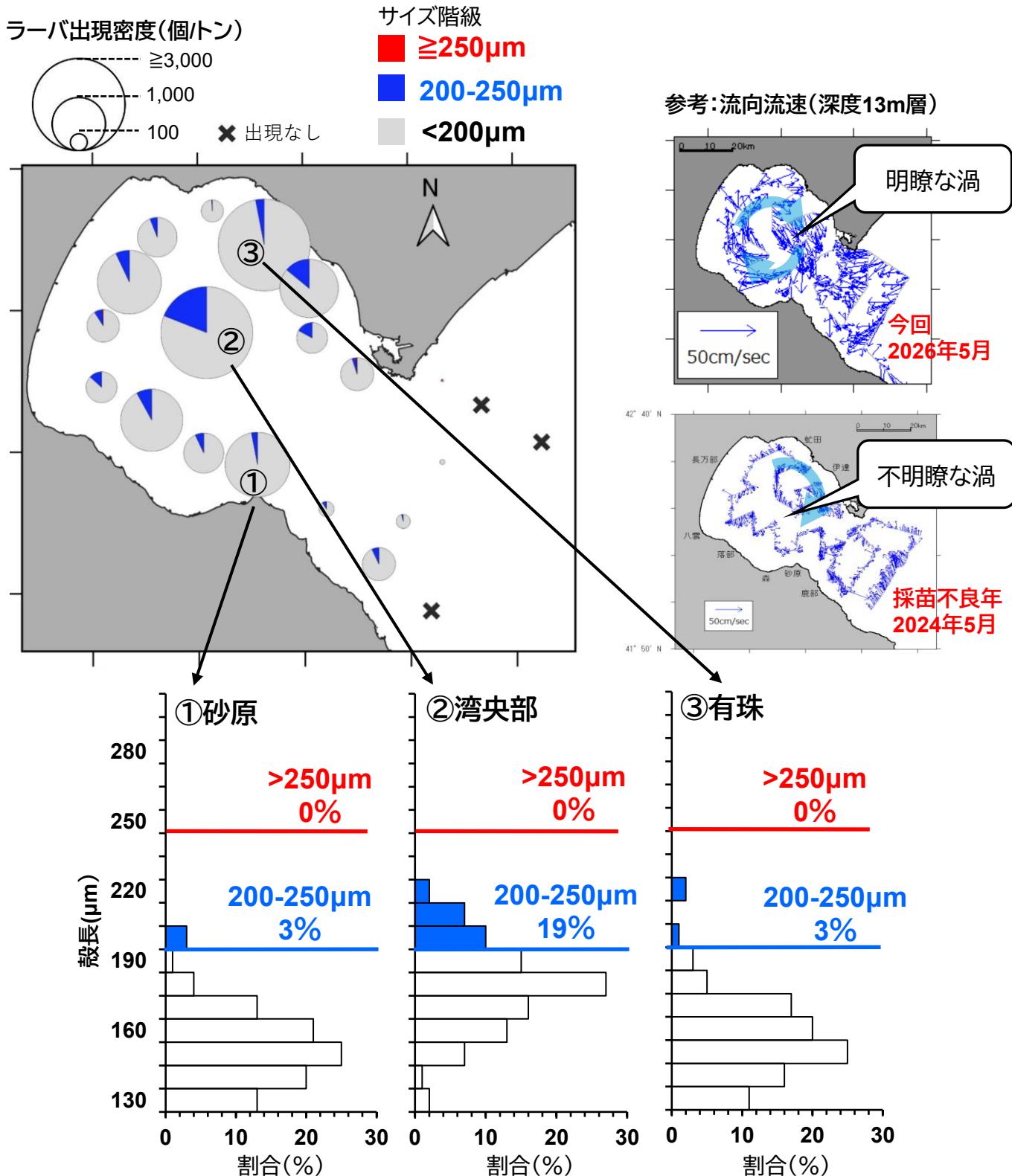
- 近年の高毒化の原因として、湾外からの貝毒プランクトンの流入の可能性が指摘されています。
- 湾内:今年(2026)5月では貝毒プランクトン密度は昨年や一昨年よりも低かったです。
※警戒基準(100細胞/L)は上回っていました。
- 湾外:今年(2026)5月では貝毒プランクトン密度は昨年よりも低く、一昨年と同程度でした。



付図1 場所とサイズの違い

ラーバが湾中央部に集まっている可能性。

- 沿岸部の砂原(①)や有珠(③)では150 μ mが最多でした。
- 一方で、湾中央部(②)は180 μ mが最も多く、沿岸部よりも大きいサイズでした。これは沿岸部よりも早く生まれた群とみられます。また、出現数は全調査地点中で最高でした。
- 採苗不良年(2024年)の同時期と比べて、明瞭な時計回りの渦が形成されていました(参考図)。早期に生まれたラーバが湾の中央部に集まっているとみられます。こうした状況を踏まえると、今年は採苗不良年よりもラーバが湾外に流出しにくい環境条件になっています。



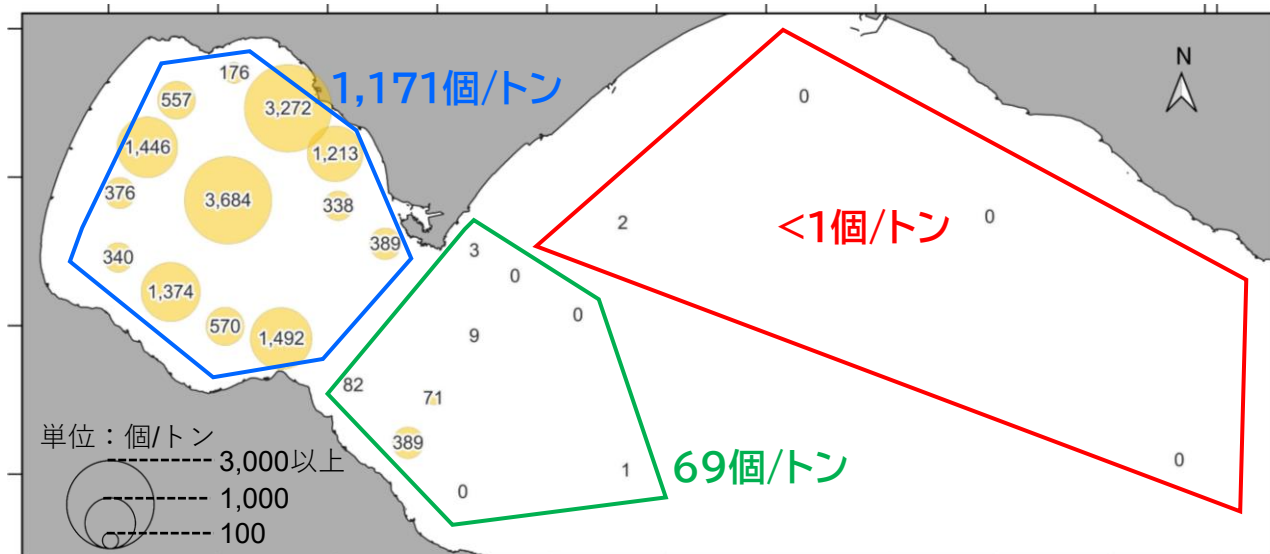
付図2 湾外のラーバの分布

湾内に比べてかなり少ない。

- 太平洋西部海域(赤の範囲)にもラーバは出現しましたが、最大2個/トンと非常に少なかったです。
- また、昨年と比べると、湾外(緑の範囲)のラーバ出現数が湾内の出現数に比べて相対的に少ないことが特徴です。これは前項で説明したように、ラーバが湾外に流出しにくい環境条件であることを裏付けています。

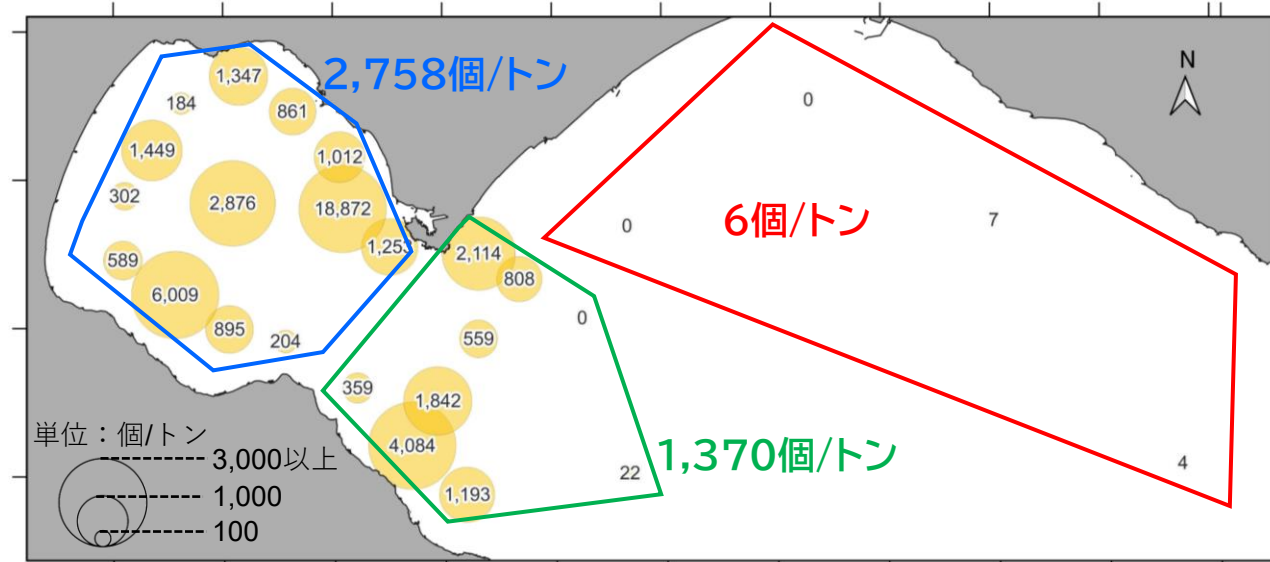
2026年5月10-11日

単位:個/トン



参考:2025年5月8-10日

単位:個/トン



今後の予定

6月上旬に第3回全湾ラーバ調査を実施する予定です。

本調査は北海道ほたて漁業振興協会の受託研究「噴火湾ホタテガイ生産安定化試験」で実施しています。